



正木啓子

大阪府道路公社
常務理事

未来の大人は遊びの達人

モノをつくることは楽しい。できたモノが多くの人役に立つことができればなおうれしい。遊び道具が少なかった頃に育った中高年の多くは、幼児期の遊びを通しモノをつくり上げる喜びを、同時に土の冷たさ、自在に走る水の輝きや怖さ、押しでも壊れない構造物の形などを覚えた。泥んこ遊びは土と水のちょうど良い混合割合を、砂場のトンネル堀は砂の締固めの方法を、折紙遊びは薄い紙でも形によっては立つことができることを、また、ままごと遊びは住宅やコミュニティのあり方をである。こうした学習は、誰かに強制されたものでも目的をもって教育されたものでもなく、遊びのなかで知らず知らず覚えたものである。自ら楽しもうとする気持ちがあれば目に見える以上のものが身につく。また、楽しそうなら興味も湧く。社会資本整備の重要性や必要性の説明をするにしても、相手が興味をもたなければこちらの熱意は十分に伝わらない。勘違いや先入観による「ハード」や

「ハコモノ」「3K」という言葉への拒否反応があればなおさらである。

国語辞書を紐解くと、教育は「知識の啓発、技能の教授、人間性の涵養かんようなどを図り、その人のもつ能力を伸ばそうと試みること」とある。それなら、土木建築の基礎的な知識や技能を遊びのなかで喜んで体験できる幼児期に、身の回りの材料でモノをつくり出す機会と時間をたっぷりとることが最高の土木建築教育ではないだろうか。私たちが生活している社会環境は、時間とともに成長衰退を繰り返し変化している。来るべき社会のニーズに最もふさわしい基盤施設を整備するためには、来るべき時代に活躍する未来の大人が、自ら考えモノをつくる喜びを知り、五感を使って土、水、木などの自然材料を楽しみ感性豊かな遊びの達人であることだ。遊びの達人・彼らこそ、私たちの生活を環境・産業・健康福祉などさまざまな面で支える未来の土木建築技術者かその強力な応援団になるだろう。